

えにし  
渋沢栄一と下商の縁に思う「温故知新」(『下商新聞』、令和3年10月18日)

校長 久保田 力哉

来る10月18日は下商の創立記念日です。明治17年以来、本校は137年に亘る歴史の中で、県内はもとより国内外の各界・各方面において有為な人材を輩出してまいりましたが、その数は本年度末で3万人を超えることとなります。

また、定時制課程は現在の4年生が卒業する本年度末をもって、昭和27年に設置されて以来の70年という、長い歴史を閉じることになっています。

このような節目の年に、校長を勤めさせていただいておりますことに、改めて身の引き締まる思いがいたします。

さて、今回は1学期終業式でも紹介しました、渋沢栄一と本校の縁<sup>えにし</sup>について詳しく掘り下げてみたいと思います。なお、筆硯<sup>ひっけん</sup>に当たっては、本校校誌「千畳原」の前身である「校友会誌」を参考にさせていただきました。

渋沢栄一は天保11年(1840年)、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。家業の畑作、藍玉の製造・販売、養蚕を手伝う一方、幼い頃から父に学問の手ほどきを受け、従兄弟の尾高惇忠<sup>あつただ</sup>から本格的に論語などを学びます。

青年期に倒幕思想を抱き、従兄弟たちとともに尊王攘夷派の志士となることをめざしますが、京に上がった後は何の巡り合わせか一転して一橋慶喜に仕えることになり、そこで家政の改善などに実力を発揮し、次第に認められていきます。

渋沢は27歳の時、15代将軍となった徳川慶喜の実弟・後の水戸藩主、徳川昭武に随行しパリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の社会の内情に広く通ずることができました。

明治維新となり欧州から帰国した渋沢は、株式会社制度を採用した金融商社である「商法会所」を静岡に設立しました。その後、明治政府に招かれ大蔵省の一員となり、新しい国づくりに深く関わっていくこととなります。

明治6年(1873年)に大蔵省を辞した後、渋沢は日本最古の民間資本による銀行である「第一国立銀行」の総監役(後に頭取)となったことを皮切りに、民間経済人として活動しました。

渋沢は、第一国立銀行を拠点に株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、また、「道徳経済合一」説を説き続け、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。

また、渋沢は約600の教育機関・社会公共事業の支援並びに民間外交に尽力し、多くの人々に惜しまれながら昭和6年(1931年)、91年の生涯を閉じました。

(以上、公益財団法人 渋沢栄一記念財団ホームページを参照し一部修正)

次に、渋沢と本校の関係についてですが、学校WEBページ等でも紹介していますように、本校の校長室には、渋沢の揮毫<sup>きごう</sup>(毛筆で文字や絵をかくこと)による額が掲げられ

ています。

この額には、「博く民に施して よく衆をすくう」と書かれています。前述のように、渋沢は幼少期から論語に親しみ、生涯においてこれを拠り所に、倫理と利益の両立を掲げています。

額の字句も出典は論語にありますが、渋沢は自身の著書にこれを引用して、「商業は単に利益を計るのみであってはならない。必ずや世のためになり、一般の人々に利益をもたらすものでなければならない。」と論じています。このことは、現代における、「企業は利潤追求だけでなく、組織活動が社会へ与える影響に責任をもち、あらゆるステークホルダーからの要求に対して、適切な意思決定をする責任をもつ。」というCSR (Corporate Social Responsibility)、つまり「企業の社会的責任」に他なりません。

このように、日本経済の発展に大きく貢献した渋沢ですが、実は一度、本校に立ち寄られています。「校友会誌」第49号(大正3年10月発行)には、大正3年(1914年)6月、渋沢は中国を視察した帰途、当時の齋藤軍八郎校長(第8代)の依頼により、講堂で生徒に講演をされたという記録が残っています。

以下に、校友会誌に記されている渋沢の講演の内容を紹介します。

なお、原文の旧字体による表記、現在では不適切とされる文言、難解な語句等につきましては、修正や説明を加えてあります。

中国を旅行いたしました帰途御当地に立ち寄り、齋藤校長の御案内で只今参校し、諸君の前に立つに至った次第であります。さて私の今回の旅行は真の漫遊いわゆるで所謂国際的な意味や、また行々敷実業視察という程のものではありません。加之しかのみならず(それだけでなく)それも途中病気に罹り僅かに目的の半分しか旅行しないで戻りましたのです。さりながら私は常々商業教育の大切なるを信じ、従来その発展に微力を致しております関係より今日の懇請を喜び楽しんで罷り出たのであります。

(中略)

なお一言申し上げたきは、私は久しき以前より商業教育の必要を感じておったものであります。蓋し(確かに)その初めは明治七年のことで、当時の商業教育というものは極めて簡単で、読物としてはただ商売往来(江戸時代、商業に必要な語彙やそれに関する知識、商人の心構えを説いた、主に商人に対して作られた初等教科書)一冊で算術書は塵劫記(江戸時代の算術書)位に止まり、またこの頃までの商業は、御承知の通り市場範囲狭く活動の余地なく、従って何等知識の必要をも感じなかった。

(中略)

これに於いて焦眉の急を感じたのは我が商人に商業知識の涵養をなすことであつた。併しながら商人自身に之を自覚する力もなかったのである。故に吾々はその奨励に一層努力を要した。爾来四十年の久しき一日も怠らず、微力を尽くし遂にその甲斐あり、今や

我が商人知識は相当に普及し、又多くの学校も出来、以前の如くその<sup>けつぼう</sup>缺乏を感じず富致の術も外国商人に対し甚だ遜色なきに至りましたは喜ぶべきことであるが、又<sup>またばんきん</sup>輓近（近頃）富致の為には、その方法を選ばずして<sup>ばくしん</sup>驀進し成功を急ぐと言うべきことである。

（中略）

今これを史に徴する（照らし合わせる）に、昔藤原時平は菅原道真を<sup>おとし</sup>貶めて身宇多、醍醐二朝に歴事し、権勢を専らにした所謂大成功者と言うてもよい。然れども後世の<sup>きよ</sup>毀誉褒貶は果たして如何、又楠正成対足利尊氏の関係も亦これに同じく、要するに不朽の成功は即ち後世に及んでその名の益々高まるものである。時平、尊氏の栄華決して<sup>うらや</sup>羨むに足らず、これと同じく今日の商、工業者中徒らに富致を急ぐが如きは、私の断じて採らざる所、宜しく人格を養い、手段を慎み、方法を選び、以って富を積むべきなり。

（以下略）

このように、渋沢は「論語と算盤」の言葉で代表される「道德経済合一」思想という自身の信念に加え、商業教育の重要性について、本校の生徒を前に力説しています。この文を読むと、古希をとうに超えながらも、青年の如く爛々と目を輝かせながら熱く思いを語っている渋沢の姿が、私の目の前に浮かんできます。

今回、本校の歴史の一端を紐解いてみましたが、私は、渋沢栄一という歴史的偉人が本校を訪れていたことのみならず、100年以上前の本校での出来事が詳細に記録されていることにも深く感銘を受けました。

私たちは、先輩から受け継いだ下商の伝統を正しく理解し、そして、より良いものにして後輩に託さなければなりません。そのために、まずは古きを知り（温故）、その上で新たな可能性に向かって努力をしていく（知新）ことが大切であると思います。

今回の寄稿が、その一助となれば幸いです。